

『普勸坐禅儀』の一展開

——特に『学道用心集』を中心として——

神 戸 信 寅

一

道元禪師は嘉禄三年（一二二七）、二十八歳の時、宋より帰国するや、師の如浄のもとで体得してきたところの、いわゆる正伝の仏法の宣布と衆生救済といった「弘法救生」をおもいとして、まず初めに『普勸坐禅儀』を撰述し、禪師の正法展開の軸となつてゐる坐禅の威儀作法を普く勧めんとした。しかし、この正伝の仏法を積極的に弘通するということを、一時おしとどめて「激揚のときをまつ」べく、寛喜二年（一二三〇）、建仁寺より深草の安養院に移つていった。

安養院に移り、弘通を一時放下していた禪師のもとには、日をおつて求道の念に燃える人々が訪ねてくるようになり、そして、参集の人々が多くなれば、「弘法救生」のおもいも、ひとまず、そういった問法訪道の人々を対象として、その方に力が入ることとなるのも自然のなりゆきと思われる。そこで、それに答えるべく、安養院に移つた翌年には「辨道話」

が撰述され、坐禅辨道を強調して、正伝の坐禅に対する見解を示している。そして、求道の人々が更に多くなれば、入門を希望し、専一に坐禅辨道をしたいと願う人々もでてきたと思われる。そういった状況の時、外護者であつた正覚禪尼や弘誓院（藤原教家）等の招請助力があり、坐禅辨道の道場が天福元年（一二三三）の春、極楽寺の旧址に開かれることとなつた。興聖宝林寺である。

まず、興聖寺が開かれた夏安居の日には、最初の示衆である「正法眼蔵」摩訶般若波羅蜜が説かれて、般若の根本精神が拈提され、更に中元の日（七月十五日）にいたつて、嘉禄三年に撰述した『普勸坐禅儀』が浄書されている。そして、中秋の頃には、万法に対する禪師の世界観ともいふべき「正法眼蔵」現成公案が撰述され、俗弟子に与えられている。一方、参学の学人には、学道の用心・心得を説いた『学道用心集』が天福二年（一二三四）頃に集録されている。即ち、帰国早

々に撰述した『普勸坐禅儀』を軸とした正伝の仏法を、問法訪道の学人に対して随時説きはじめたわけであるが、その説き聞かしたものを集録し一書に成したものがこの書である。しかし、その説き方は、『普勸坐禅儀』のように、正伝の仏法側から正伝の仏法そのままを説くというより、正伝の仏法を参学しようとする学人の立場に立つての説示となつてゐる。そこで、学人の側から説かれた『学道用心集』において、『普勸坐禅儀』で開示されたところの坐禅を軸とした正伝の仏法がどのように展開されているか、その一端を窺つてみたいと思う。

二

ここで、学道というのは仏祖道を参学することである。そして、正伝の仏法としての仏祖道を参学するには、まず、それを参学しようとする心が発らなければならない。それによつて、仏祖道に対しての問題意識も起り、参学すべき仏祖道も明確化されてくるといえる。それ故、参学しようとする心の発動は、仏祖道を参学しようとする学人にはなくてはならないものであるから、『学道用心集』の初めに「菩提心を発すべき事」として、その重要性を強調している。菩提心を発すことによつて、仏祖道への参学が打出されてくるが、それは「行（修行）」においての参学でなくてはならないといつてゐる。行は「縦ひ行に信法頓漸の異有るも、必ず行を待つ

て超証す」というように、教えを信じてから行に入る人、あるいは諸法の実相を理解してから行に入る人、または、直に悟る人、しだいに悟る人といった違いはあつても、仏祖道を参学しようとする者は、行に依らなければならないとするのである。

しかし、修行をもつて仏祖道を得るには、その修行が仏祖道といった目標に向つての修行でなければならないわけであるが、参学しようとする学人自身でもつて、仏祖道といった目標を定め、その方向に修行を進めてゆくというのではなく、その道の先輩であるところの先達の真訣をうけて参学するのでなくてはならないといつてゐる。いわゆる「正師」に学ぶことにより仏祖道といつた目標が指示され方向づけられて行くのである。それ故、学道の人には私心を用いず、正師に参問し正法を聞くといつた「参師聞法」に随つた参学の仕方であれば、仏祖道の参学とはいえないといつてゐる。換言すれば、正師によつて方向づけられ、それに随つて参学することによつて、仏祖道への参学路線が敷かれることとなる。それ故、「参師聞法」は仏祖道を参学しようとする学人にとつて必要条件とされるものである。

三

しかしながら、「参師聞法」によつて、仏祖道の方向に修行が打出されるということは、形式的にみれば、仏祖道が目

的視されていることであつて修行は手段といったこととなる。そこで「参師聞法」によつて方向づけされた修行が、やがて断ち切られて、逆に目的であるところの仏祖道の側からの修行となつて打出されてくること、そこにこそ眞の仏祖道の参学がなされて行くものであるといえる。それ故、仏祖道に向つて打出された修行が、回光返照の退歩となつて、仏祖道に向つていたのを断ち切り、仏祖道そのものを開示して行くべき唯一のし方が「坐禅」であるとしている。いわゆる「参師聞法」とともに「功夫坐禅」が説かれるのである。このことは、学人の側からの仏祖道の参学が、「参師聞法」に随つて仏祖道に向けられ、そして修行が打出さなければならぬのであるが、その修行は「意根を坐断して、知解の路に向かはざらしむ」ところの「功夫坐禅」としての修行とならなければならなかつたわけである。

このようにして、『普勸坐禅儀』において説かれた正伝の仏法が、禅師のもとに参集してきた学人に対して、実際に説示指導するにあつて、かつて禅師が如浄のもとで「身心脱落」の体験により、自覚的に伝えたと同じように、学人に自覚され伝えられて行くために、「参師聞法」と「功夫坐禅」とを両般とした学道形態を『学道用心集』で展開せしめて行くこととなつたといえる。即ち、正伝の仏法に対しての参学のし方において、『学道用心集』は「参師聞法」と「功夫坐禅」

とを互に道環させ、それによつて、普遍的な正伝の仏法を学人の身心の上に自覚させ、正伝せんとする、いわば、実際の具体的な学道のし方を展開せしめているのである。

それでは、仏祖道側から打出されていたとする「功夫坐禅」は何んによつて発動され、打出されたかといへば、やはり、仏祖道を参学しようとして発動された心と同じく、菩提心を発することによつてである。ただ、発菩提心によつて打出された修行が「坐禅」修行であれば、その発菩提心は、仏祖道を目的視して発されている「発菩提心」ではなく、仏祖道側から「菩提心発」と、仏祖道自ら発動せしめた発菩提心となつていたことである。即ち、仏祖道を参学しようとする心を坐断する坐禅修行は、仏祖道から直下に打出されていたものである。

四

以上、『学道用心集』においての学道は、菩提（涅槃）からの発心・修行といった方向をもつた「功夫坐禅」と、発心からの修行・菩提（槃涅）といった方向をもつた「参師聞法」とを両般としている。そして、このような学道が展開されるにいたつたのは、まず、『普勸坐禅儀』が「坐禅の威儀作法」そのものにポイントを置き、坐禅のみで正伝の仏法を示そうとしているのに対し、『学道用心集』においては、「学人の学道のし方」という側にポイントを置き、正伝の仏法を参学し

ようとしている。このように、参学の学人の側にポイントを置くことは、その学人の側に、正伝の仏法に対しての自覚がでてこなければならぬから、そのために、「参師聞法」による学道が強調されるにいたつたのであらう。

次に、『学道用心集』において、特に「参師聞法」が強調されるにいたつたのは、禅師自身、如浄に相見し「身心脱落」した体験にもとづき、正伝の仏法は「面授」により相伝されるものといった体験から、「正師」を最も重視していること。更に、禅師のもとに参集してきた学人の側より、正伝の仏法を弘通するにあたり、特に「正師」について参問し正法を聞くことの必要性を強調しなければ正伝の仏法が弘通しにくい事情が教団内にあつたのかもしれない。が、とにかく、『普勧坐禅儀』において、只管打坐の威儀作法といった一つの柱を中心に示された正伝の仏法が、『学道用心集』では「参師聞法」と「功夫坐禅」との二つの柱が軸となつて展開されていることを知るのである。

執筆者紹介(七)

倉田 治夫	(東京大学大学院)
山上 證道	(神戸女子大学助教授)
立川 武蔵	(名古屋大学助教授・Ph.D.)
長尾 睦司	(熊本音楽短期大学助教授)
磯田 照文	(東北大学講師)
木村 俊彦	(正眼短期大学助教授)
小林 明美	(京都大学大学院修了)
佐々木 恵精	(池坊短期大学助教授)
常盤 義伸	(花園大学教授)
長 島 孝行	(国立国会図書館主査)
桂 紹隆	(広島大学講師・Ph.D.)
袴谷 憲昭	(駒沢大学講師)
松村 恒	(東京大学大学院)
菱田 邦男	(愛知教育大学助教授)
池田 健太郎	(名古屋大学大学院)
上村 勝彦	(東方学院講師)
本多 恵	(同朋大学助教授)
太地原 豊	(京都大学教授)
八木 徹	(京都大学大学院)